

次号予告

とびら.....洞爺リハセンター 前 田 守

特集＝第8回日本作業療法士協会学会

一般演題まとめ 都心障センター 寺 山 久美子
 一般演題まとめ..... 九州リハ大 佐 藤 剛
 シンポジウム「老人福祉とOT」..... 甲州中央温泉病院 斎 藤 延 男
 分科会「精神科OTにおける作業分析」..... 日下部病院 富 岡 詔 子
 分科会「療育における治療と教育」... 道立肢体不自由児総合療育センター 丸 谷 隆 明
 分科会「身障者の Home Layout と OT の役割」.....兵庫リハセンター 大喜多 潤
 座談会／第8回日本作業療法士協会学会をふり返って

.....リハビリテーション学院 宮前 珠子, 他

精神科 OT の

展開..... 肥前療養所 伊 藤 寛 子
 研究と報告

盲人単独行動技術の実際
 ——基本要素別訓法について——..... 国立視力障害センター 田 中 一 郎

資 料

正常児における基本的習慣自立時期の調査(1)..... のじきく園 森下 孝夫, 他

Q and A A : 都養育院 松 村 秩
 Q : 慶応病院 藤 沢 しげ子

メディカルプロGRESS..... 横浜市大 大 川 嗣 雄
自治医大 大 井 淑 雄

編集後記

第9回PT学会が特集として、とり上げられているが、座談会のなかで、指摘されているように、PTの研究発表の内容が低調なのは、評価がきちんとなされていないことが、その原因の一つとして指摘されている。

対照比較、量的な比較が厳密に統計的処理を経たおこなわれていない。やはり研究計画の立て方や方法論に関する基礎訓練がなされていないことがあげられよう。本格的な研究はアメリカあたりでは、研究方法を身につけた PhD 取得者が研究者としての資格をもって行なうものが一般的だといわれている。そういう意味では日本の社会のもつ性格は、研究成果の発表の場であるとはいえないであろう。日本の学会は独特の性格をもって、それはそれなりに意味があるし、意味づけてゆく必要があると思う。しかし一番大事なことはセラピスト自身が日常の診療について厳しい評価

を普段に行なうという姿勢であろう。

日本のPT, OTはこのジャーナルに象徴されているように、法的にも双児のようなあつかいをされており、諸外国のように、それぞれ独自の背景と発展の歴史をもっていない。とすると社会的に、その独自性が認識されておらず、PT, OT間においてもお互いにはっきりしない面がある。

独立した専門性をもった専門職であるにもかかわらず、日常の診療のなかでは、きわめてあいまいである。現段階のさまざまな実状といろいろな考え方が混沌として存在しているのが偽らざる現実であろう。

脊損患者の実状が「研究と報告」にのせられているが、地域社会での生活の実態がもっとはっきりするようなかたちで、今後いろんな障害者の調査がおこなわれ、発表されることが、リハビリの理念からも絶対に必要である。(松村秩)

編集顧問

天 児 民 和
 九州労災病院長

五 味 重 春
 府中リハビリ学院長

砂 原 茂 一
 国立療養所東京病院長

津 山 直 一
 東京大学教授・整形外科
 (五十音順, 以下同じ)

編集委員

上 田 敏
 東大リハビリ部

荻 島 秀 男
 都養育院リハビリ部

佐 藤 馨
 神奈川リハセンター

鈴 木 明 子
 府中リハビリ学院

谷 岡 淳
 自治医科大学

田 村 美枝子
 リハビリ学院

寺 山 久美子
 都心障センター

松 村 秩
 都養育院リハビリ部

編集同人

明 石 謙
 大 井 淑 雄
 大 川 嗣 雄
 大 橋 博
 鎌 倉 矩 子
 紀 伊 克 昌
 小 林 夏 子
 駒 沢 治 夫
 佐 藤 剛
 田 原 澄 彦
 富 岡 詔 子
 奈 良 勲
 藤 沢 しげ子
 藤 本 欽 也
 前 田 守
 松 本 妙 子
 矢 谷 令 子
 山 下 隆 昭
 横 山 巖
 和 才 嘉 昭

(担当 細田・松橋)